

クリニックでの取り組み

平谷こども発達クリニック
言語聴覚士 山口 大輔

クリニックの個別STにおける、 就学前の発達障害のお子さんへの 読み・書きのスキル習得へのフォロー

- 音韻認知の面 語頭音での絵選択・モーラ分解・しりとり etc.
- 視知覚の面 はめいた・パズル・タングラム・ペグさし等の見本合わせ etc.
- 読みの面 キーワード法(一文字や語頭音の語の意味との連合)
サイトワード(語レベルでのまとめ読みできるかな単語を増やす)
- 運筆・書字の面 ぬり絵・線なぞり・迷路・点つなぎ etc.
- 語彙・統語の面

⇒上記の読み・書きに関わる各面でのお子さんの力を、
療育場面、評価を通して把握

→就学後の読み書きの弱さの出現の可能性について、
頭に置きつつ支援

就学前よりクリニックSTでフォローしている
現在 小1のお子さん70名

〔男子 56名 女子 14名 平均IQ 83.6±17.6
ASD 49名 ADHD 26名 SR 3名 構音障害 8名 吃音 3名
(ただし、診断の重複あり)〕

就学後、読みの弱さが判明 22名
書字の弱さが判明 13名
(読みの弱さ・書字の弱さが重複 11名)

読み書き未習得 6名(内、5名はIQ70未満)

就学後のお子さんへの読み書きのフォロー

医師の診察 重複する障害(ADHD・ASD)への投薬

ST個別

心理個別 登校渋りなど、行動面、心理面へのフォロー

支援機器グループ

学習支援教室

+

石坂先生、伊藤先生、河野先生のスーパーバイズ・勉強会

支援機器グループ(昨年より立ち上げ)

河野先生が担当

対象:読字障害・書字障害の小学生
(グループの人数 6名程度)

頻度:月1回、5回コース

学習におけるタブレットの有効な使用法を体験してもらう

(WEBで情報収集→mind mapで情報の整理→まとめる
etc.)

学習支援教室(今年冬より立ち上げ)

対象:読字障害、書字障害の小学生(一グループ6名程度)
頻度:週1回

大手の学習教室の教材(漢字・読解)を使用、
個々のお子さんの学習達成度に応じたプリントを実施
+
個別STで取り出して、漢字の語義、文章の背景知識等、
お子さんそれぞれの弱い面に介入
定期的な養育者との面談

知的能力 (IQ)と読みの流暢性の関係について

対象:発達性ディスレクシアのIQ70以上の小学生

(計75名 IQ平均90.9±10.6)

WISCのFSIQと稲垣式音読検査の

有意味語・無意味語の音読時間の相関を低・中・高学年で確認

	有意味語	無意味語
低学年FSIQ	-0.20	0.04
中学年FSIQ	-0.41 **	-0.11
高学年FSIQ	-0.62 ***	-0.26

p<.01 *p<.001

無意味語では全ての学年で相関一

⇒文字→音韻への変換のレベルの障害はIQの影響を受けない?

有意味語では学年が上がると中程度の相関に

⇒有意味語の読みにおいては、語彙力も関係するため、
学年が上がるとIQが影響?

障害が重複する場合の、読み・書きへの影響

ASD:

読解・作文のレベルでのイメージの少なさ

こだわり(誤りを許せない・問題を飛ばせない・完璧主義 etc.)

ADHD:

読み飛ばし、勝手読み等の誤りが、より顕著に 字形の崩れ

自身の誤りへの気づき、見直しが弱い

知的に境界域:

語彙の少なさ 読解のレベルで、概念の理解の弱さ

読み書きにとどまらない学習全般の遅れ

音韻障害(機能性構音障害):

構音の誤りが書字の誤りに出現(特に音韻認知の弱さを伴う場合)

まとめ:

就学前からフォローしている読み・書きに弱さを持つお子さんは、
他の障害が合併しており、知的能力も様々

↓

養育者への読み・書きの弱さ(の出現の可能性)への示唆、
支援の方向性、予後についての共有・すり合わせの必要性

お子さんの特性を頭に置いた上での支援

(効果的な学習法・合った学習環境の提案)が大切

早めの介入の利点:

養育者との信頼関係作りの面

お子さんの弱さに関する学習課題への予防的介入が可能

二次的な問題の出現への見守り

お子さんについて、学校での個別支援への拒否感が相対的に少ない